

1 学校教育目標

人間性豊かな 自主的 創造的 実践力のある子どもの育成

2 研究主題

学ぶことを楽しむ児童の育成

- 学びを自分事とするための授業づくりを通して -

3 研究計画について

(1) 主題設定について

本校の児童の実態に目を向けると、学習に対して受け身の児童が多く、教師からの指示を待っている様子が見られる。また、自分の考えをもったり、自分で決めたりすることを苦手としている児童も多い。このような児童が学ぶことを楽しむには、直面している問題を「自分事」として捉える必要がある。学びを「自分事」として考えることができれば、自らやりたいこと・やるべきことを自己選択・自己決定し、行動を起こし、自己調整を繰り返すことができるだろう。そうすることで、児童は自分が目指す目標の実現をしていけると考える。また、対話を通じて他者とともに問題解決に取り組むことも重要であり、他者の考えを尊重し、自分の考えを修正することも学びが「自分事」となっている姿だと考える。

情報化の急進に伴い、教育の価値は、単に「多くの知識を記憶していること」から、「確かな知識を基盤としつつ、それをいかに活用して未知の課題を解決するか」という資質・能力へと劇的にシフトしている。もちろん、科学的な思考を支えるのは基礎・基本となる知識であり、その習得の重要性は揺るぎない。しかし、予測困難な時代を自律的に生き抜く子供たちには、習得した知識を断片的な情報のまま終わらせず、それらを結びつけ、根拠を持って未来を切り拓く力が不可欠である。これは、全国小学校理科研究協議会の大会主題である「グローバル社会を生き抜く児童の育成」の実現において、極めて重要な視点である。本校が目指すのは、こうした高度な問題解決の過程を、児童が受動的にこなすのではなく、自らの知的な衝動として「楽しむ」姿である。「なぜだろう」という疑問から始まり、試行錯誤のプロセスそのものに価値を見出す「学びを楽しむ」経験は、正解のない問いに対しても科学的なエビデンスに基づいて妥当な選択を下すことができる「汎用的な資質・能力」の基盤となると考え、本主題を設定した。

(2) 本年度の研究の方向性

本校は令和7年度、8年度の2年間千葉市教育委員会研究指定「学習指導」を受け、「理科・生活科」の研究を進めることとした。今年度も、昨年度までの実践から、「学ぶことを楽しむ児童像」の一層の具体化の必要性を感じ、次のように設定した。

【学ぶことを楽しむ児童像】

- ①学びを決めることができる子
- ②自身の成長を実感し、学び方を調整することができる子
- ③多様な他者と学び合うことができる子
- ④学びを社会とつなげることができる子

各教科等で学ぶことを楽しむ児童の育成に取り組んでいくが、今年度は理科および生活科に絞って研究を行うものとする。

(3) 研究の視点について

研究主題である、「学ぶことを楽しむ児童の育成」の達成に向けて、副題を「学びを自分事とするための授業づくりを通して」とした。「学びを自分事」とするためには、「個別最適な学び」を通して、児童が思いや願いを実現すること、自分の成長や学びの有用性に気付くこと、「協働的な学び」を通して、他者の考えのよさに気付いたり、自分の考えを深めたりすること、学んだことを身近なものに結び付け、学びの有用性を感じる必要があると考えることから以下の2つの視点を設定する。

【視点1】

〈個別最適な学びを通して、学びを自分事としていくための工夫〉

「個別最適な学びを通して、学びを自分事としていく」とは、児童が自分の思いや願いを実現していくことである。児童一人一人、問題を見いだす対象や興味をもつものは違う。また、問題を解決するために合った手段や方法も様々である。自分に合った「解決方法を発想する」ことで、学びが自分事となり、思いや願いを実現できるようにしていく。そのために教師は、単元やその時間に習得する資質・能力は設定しつつも、児童一人一人の特性や興味関心を考慮しながら、単元構成を工夫したり、これまでに得た知識や経験を活用することで解くことができるような教材の工夫を行ったりする。また、「学びを自分事としていく」ためには、毎時間の終わりと単元の終わりに児童の振り返りも充実させていく。学びを進めていく中で、自身にどのような力が付いたのか認知し、自分の成長に気付いたり、学びがどのようなときに役立ったのかに気付いたりすることで、学びは自分事となり、次の思いや願いが生まれる。この一連の流れを繰り返し、自分の学びを自分事として実現していくことで、自己肯定感が高まり、児童はよりよい学習者になっていくことにつながると考えた。

個別最適な学びを通して、学びを自分事とする姿	
理科	生活科
①今までの理科の学習で学んだことと、これから学習することを関連付けて考えることができる。	①「作りたい」「調べたい」「やってみたい」「もっとよくしたい」などの思いをもち、その実現に向けて、試行錯誤しながら、学習に没頭することができる。
②「なぜ」「どうして」の疑問をもち、自分なりの予想を立てることができる。	②個々の思いを大切にし、植物を育てたり、おもちゃを作ったりする中で、「自分の〇〇」という意識で、愛着をもって学習に取り組むことができる。
③疑問に思ったことについて、自ら実験方法を考えたり、解決方法を考えたりし、粘り強く取り組むことができる。	③学んだことを、言葉や絵、動作などで表現する活動を通して、自分の学びに気付くことができる。
④観察や実験を通して、わかったこと、考えたこと、疑問に思ったことを自分なりに考察したり、まとめたりすることができる。	④育てたり、作ったり、調べたりする中で、できるようになったことが増えたことを自覚し、自分の成長に気付くことができる。
⑤学習したことを振り返る際、自らの言葉でまとめたり、生活と結び付けたりして、学びを自分のものにすることができる。また、自身の成長を感じたり、再度学び方を調整したりすることができる。	⑤学習したことを振り返ることで、学習したことは、自分たちの生活とつながりがあることに気付くことができる。

【具体的な手立て（例）】

- ・自己選択・自己決定を可能にする単元構成、多様な学習形態の工夫
- ・児童が自身の力で解決が可能と捉えられるような課題提示の工夫
- ・自己の成長に気付いたり、学びの有用性に気付いたりするための振返りの工夫

【視点２】

〈協働的な学びを通して、学びを自分事としていくための工夫〉

「協働的な学びを通して学びを自分事としていく」とは、学級の友達をはじめとした他者との対話や考えの交流を通して、自身の考えを深めることをいう。そのためには、児童が自分の考えをアウトプットする機会を積極的に設けたり、話し合い活動や協働作業を行う際の場の設定を工夫したりするなどの工夫が考えられる。またその中には安心して自分の考えを表現できる話し合いのルールや雰囲気、話し手の目を見て聞くといったマナーも含まれる。また、ＩＣＴを活用し外部の機関や人材と学ぶことで効果的な学びになると考えられる。

個別最適な学びが充実することで、児童は自身の考えに自信をもって伝えなくなったり、友達の考えを知りなくなったりし、自ら協働的な学びに取り組んでいくと考える。さらに、自分とは違う考えの価値に気づき、個々の学びを再調整したり、深めたりすることは、学びが「自分事」となっている姿だと考えられる。

協働的な学びを通して、学びを自分事とする姿	
理科	生活科
①問題を解決する方法を考える中で、意見を交換したり、積極的に話し合い活動を行ったりすることで、友達の意見も踏まえて、自分なりの解決方法を考えることができる。 ②友達との話し合いの中で、多様な解決方法があることを実感し、その解決方法の根拠を理解することができる。 ③自身の解決方法や結論を、友達のものと比較することで、自信をもったり、改めたりし、自分の学びをよりよいものにすることができる。 ④友達と意見交換をしたり、一緒に活動したりすることを通して、自分の視野が広がったことを実感し、共に学ぶよさを感じることができる。また、学んだことを身近なものに結び付け、学びのよさを感じることができる。	①友達と話し合ったり、一緒に活動したりする中で、自分では気付くことができなかったものに気付くことができ、友達と活動するよさを感じることができる。 ②「伝えたい」「知らせたい」「教えたい」という思いを実現するために、伝え合いの場を設けることで、自分では気付くことができなかったものに気付くことができる。また、伝える相手を意識して話すことで、自分の気付きが確かなものになり、気付きの質を高めることができる。 ③公園探検やおもちゃ作り、町探検等における友達の発見を聞くことで、自分の学びと比較したり、見直したり、取り入れたりし、気付きの質を高めることができる。また、ものや地域に愛着をもつことができる。

【具体的な手立て（例）】

- ・アウトプットする機会の工夫（単元構成の工夫、発表形式、方法等）

- ・多様な考えを交流するための伝え合う場の工夫（構成、人数、ルールやマナー等）
- ・学びを広げるための外部機関、人材との連携
- ・他者と学ぶことで、多様な視点や考え方に触れ、学びが深まることに気付くための振返りの工夫

（４）研究の視点と付けたい力について

「個別最適な学び」を通して、児童が思いや願いを実現させたり、自分の成長や学びの有用性に気付いたりするためには、児童が日々の学習の中で、自己決定や自己選択等の力が働いていた場面を意識する必要がある。また、「協働的な学び」を通して、他者の考えのよさに気付いたり、自分の考えを深めたりすること、学んだことを身近なものに結び付け、学びの有用性に気付いたりするためには、他者と学び合う力や学びを社会とつなげる力を身に付けていく必要がある。そこで、児童に付けさせたい力を２つの視点と関連付けて４つに整理するとともに視覚的にもわかりやすくできるようアイコン化した。教師と児童が付けたい力を共有することで、児童自身が働かせている力や身に付いた力を認知し、目指す児童像に迫れると考えた。

視点	付けたい力	例	呼び方
視点１ 個別最適な学び	・自己決定の力 ・自己選択の力	課題発見、計画立案、実行力 情報の理解・選択・処理、計画の修正 次時への見通しをもつ 課題解決に向けた方法の選択・決定	決める力 
	・自己理解の力 ・自己実現の力 ・自己調整の力	自己の動機付け 自己の成長のために必要な要素を考える 自己の成長の実感 自己の得意・不得意を見つめる	見つめる力 
視点２ 協働的な学び	・友達と学び合う力	他者の個性の理解、他者への働きかけ コミュニケーション能力、チームワーク、リーダーシップ 友達と関わることで新しい視点や気づきを得る 思いやり、共感・尊重、所属感	関わる力 
	・社会と学び合う力 ・学んだことを結びつける力	学んだことで生活を振り返る 学んだことで生活をよりよくする 学んで得た知識をつなげる 外部連携、外部への理解 外部への働きかけ、ものや地域への愛着をもつ	つなげる力 